

推薦学科	タイトル	著者・編者	紹介文
心理学科の おすすめ作品	『僕たちのカラフルな毎日弁護士主夫の波乱万丈奮闘記』	南和行 吉田昌史	LGBT理解のための必読本。大阪で法律事務所を営む同性弁護士カップルの日常が、大阪らしい笑いとおチを交えてエッセイ調で語られています。二人の出会いから現在までの道のりはLGBTへの無理解と偏見に彩られていますが、それを軽やかに笑いに変え、時に戦い、時に涙しながらも前を向いて生きてゆく姿にしなやかな強さを見ることができます。
	『他者の靴を履く アナ-キック・エンパシーのすすめ』	ブレイディみかこ	ベストセラーになった『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』でおなじみの著者による本。直接の続編ではありませんが、内容的には地続きと言ってよい本です。意見の異なる相手を理解するための「エンパシー」。共感とも同情とも一線を画すこの言葉を、「他者の靴を履く」と表現し、ジェンダーをはじめとする様々な問題に対して切り込んでいきます。対人援助に携わる人には必読の書です。
理学療法学科のお すすめ作品	「ほとんどない」ことにされている側から	小川たまか	マスコミに取り上げられた犯罪・社会問題を著者が取材され、年齢差別、ジェンダー格差の観点から分かりやすく解説されている短編集です。セクハラやDVを生む性差別、男尊女卑、年齢差別など、日本人の心の中にある差別意識を考えてみませんか。面白いエピソードも多くて読み進められます。他者との価値観は異なることも多いですが、異なった価値観をまず知ってみましょう。
	望まない孤独	大空 幸星	私は現在、大学に通いながら、「望まない孤独をなくす」をミッションに掲げ、NPO法人あなたのいばしょを立ち上げ、24時間365日、年齢や性別を問わず誰でも無料・匿名で利用できる相談窓口「あなたのいばしょチャット相談」運営している。(はじめにより)著者自身が孤独で苦しんだ経験から、ひとりで孤独に耐えることの限界、望まない孤独を社会全体の問題として捉え、社会全体で取り組むための具体的な対策を提示されています。
言語聴覚学科の おすすめ作品	乳房のくにて	深沢 潮	21世紀目前、福美は困窮していた。抱えた娘の父親は行方知れず、頼る実家もなく、無職。ただ、母乳だけはあまるほど出続ける。それに目を付けた、母乳を欲しがる家庭に母乳を届ける活動をしているという廣田に福美はナニイ(乳母)として雇われることに。すると、かつての同級生の政治家一家から、ナニイの指名が入り……。母乳が出ないことで母親失格の烙印を押された女と母乳が出るばかりに利用された女。対照的な二人の女の行きつく先は…。ひとはいつ「母」になるのか。母乳によって子を手放した女と母乳によって母となり得た女の視点から、母性を描いたサスペンスフルな長編。
	彼らが本気で編むときは	監督:萩上 尚子 出演者:生田 斗真 桐谷 健太	育児放棄気味の母親と2人暮らしの小学生の5年生のトモは、母親が男を追って家出をしてしまう。一人になったトモは叔父のマキオの家へ。以前にも同じ経験があったが、いまはマキオはリンコ(生田斗真)という恋人と暮らしていた。老人ホームで介護士として働くリンコは元男性のトランスジェンダーで、トモは母親よりも愛情を注いでくれるリンコに戸惑いながらも、3人の奇妙な共同生活が始まる。トモは家庭のぬくもりや優しさを与えてくれるリンコに、戸惑いながらも次第に信頼を寄せていき…。
	チョコレートドーナツ	監督:トラヴィス・ファイン 出演者:アラン・カミング	1979年カリフォルニア、ゲイの男性が育児放棄された障がいを持つ子供を育てたという実話に着想を得て製作された映画。「歌手を目指しているショーダンサーのルディと弁護士のポールはゲイカップル。母親に見捨てられたダウン症の少年マルコと出会った二人は彼を保護し、一緒に暮らすうちに家族のような愛情が芽生えていく。しかし、ルディとポールがゲイカップルだということで法律と世間の偏見に阻まれ、マルコと引き離されてしまう。アメリカの実話を基に映画化。血のつながりはなくとも、少年を守るため奔走する主人公たちの無償の愛が描かれる。日本では宮本亜門が演出、東山紀之、谷原章介らが出演し舞台化されている。
子ども教育学科のお すすめ作品	「子どもを育てない親、親が育てない子ども―妊婦検診を受けなかった母親と子どもへの支援―」	井上寿美・笹倉千佳弘 編著	文出産を控えている母親には、様々な背景があります。その様々な背景をもつ親やその子どもの問題について触れており、どのような支援が必要になるのかを考えることができる本となっています。日本に存在する親の実態やその考え、困っていることなどを知ることができる本です。子どもやその親の理解につながるのではないのでしょうか。
	「ルポ 保健室 子どもの貧困・虐待・性のリアル」	山千佳 著	学校の保健室には、貧困や虐待、いじめなどのさまざまな問題を抱えた子どもたちが最後の拠り所として集まってきます。その中で、養護教諭の方々は、子どもたちが発する心の悲鳴を聴き取り、彼らの支えとなるべく日々奮闘しています。現代の子どもたちが強いられる困難の本質を探るルポルタージュとなっています。子どもの人権と切り離せないリアルな実態を知る上で、大切なことがわかる本となっています。
	「子ども 100 年のエポック」	田和子 著	21 世紀を生きる子どもたちの保育・幼児教育に携わろうとしている学生さんにこの著を紹介したいと思います。いうまでもなく私たち、保育者には「子どもの最善の利益」の理解が強く求められます。子どもの最善の利益とは「児童の権利に関する条約」1)の第 3 条に掲げられている子どもの権利、言い換えれば子どもの人権を第一義にとらえる考え方です。子どもの発見者と呼ばれる J.J.ルソー2)が誕生するまで、一般には 子どもの人権意識はほとんどありませんでした。18 世紀以降のバスタロッチー3)やフレーベル4)等の多くの教育思想家によって、子どもを視座に据えた子ども観が生まれたのです。その流れを受けてエレン・ケイ5)は 1900 年に『児童の世紀』を発表、「20 世紀は児童の世紀である」を唱えました。その時から上記の「児童の権利に関する条約」までの 100 年の保育のエポックを記したのが、本著です。発行年度は少し古いですが、現代の混沌とした時代に、20 世紀の時空から子どもの人権、権利についての展望を示唆してくれる良著です。是非、手にとってお読みください。＊ 時代、新しく画期的な時代、ある特色づけられた時代を意味する。1)児童の権利に関する条約(子どもの権利条約)；

推薦学科	タイトル	著者・編者	紹介文
子ども教育学科のお すすめ作品	ようこそ こどものけんりのほん	えがしらみちこ／子どもの権 利・気持ちプロジェクト	今、注目を集める「子どもの権利」を、えがしらみちこさんのあたたかいイラストがやさしく紹介してくれます。 権利というと、一見難しいイメージがありますが、子どもたちと子どもに関わる大人を守る大切なもの。 子どもの権利のはじめの一步を親子で学べる絵本です。 カバー裏には子どもの権利条約ポスターを印刷。
	「つながり続けるこども食堂」	浅誠 著	こども食堂は、現在「子どもを中心とした多世代交流の地域拠点」となっています。「人をタテにもヨコにも割らない場所」であるこども食堂の包括的なあり方が、子どもたち、親たち、地域の高齢者が抱える諸課題を解決し、超少子高齢化と財政難に苦しむ日本の地域と社会を前に進めていくための潜在的な力を持っていると著者は述べています。子どもの貧困対策の一つであるこども食堂の実態を理解し、「私たちができること」はどのようなことであるのかについて、具体的に学び考えることのできる本であると思います。
社会福祉学科の おすすめ作品	『止まった刻(とき) 検証・大川小事故』	河北新報社報道部	2011(平成23)年3月11日に発生した東日本大震災の津波により、児童70人が死亡、4人が行方不明、教職員10人が犠牲となった石巻市立大川小学校。地震発生から津波到来までの約50分の間に、安全であるはずの学校で何があったのかを、当時の児童や保護者らの証言をもとに分刻みで再現し、「あの日、何ができたか」「できなかったか」についての詳細な検証がなされた一冊です。登校から下校までの学校管理下で起こった事故を我々はどう捉え、考えていく必要があるのか。この本はそれを強いメッセージとともに伝えてくれます。 同書は、その後の教育委員会の対応や事故検証委員会の検証結果、遺族による訴訟提起と第一審、控訴審判決というその後の経緯にも触れられています。悲劇を悲劇で終わらせることなく、大川小事故を未来への教訓とすることが我々に課せられた使命の一つであり、控訴審判決で示された「事前防災」の考え方は、対人援助を目指す我々にとって心にとめておくべき大切な視点だと言えるのではないのでしょうか。
	『52ヘルツのクジラたち』	町田そのこ	2024年春に映画化された作品。作者の町田そのこさんは、本文の中で52ヘルツのクジラを紹介する。「52ヘルツのクジラ。世界で一番孤独だと言われているクジラ。その声は広大な海で確かに響いているのに、受け止めてくれる仲間はどこにもいない。誰にも届かない歌声をあげ続けているクジラの存在こそ発見されているけれど、実際の姿はいまも確認されていないという。」くじらの博物館によると、一般的なクジラの音の範囲(可聴域)は、11kHz～18kHzとある。主人公の貴瑚(きこ)は「あのときのわたしは、52ヘルツの声をあげていた。」と語る。 いま、社会には、届かない「声」をあげている人がいます。「声」をあげることすら“あきらめて”しまっている人がいます。人は、誰もが誰かに寄り添い助け合って生きています。52ヘルツの声をあげている人の“声”を聴くことを『52ヘルツのクジラ』から考えて見る必要があるのではないのでしょうか。
作業療法学科の おすすめ作品	子ども若者抑圧社会・日本一社会を変える民主主義とは何かー	室橋祐貴	2019年一人の高校生の訴えをきっかけにヤングケアラーの実態調査が進みました。日本の未来をより良くするには、日常から変化を起こすことが大切であること、そのためには若者に権限を与えていき、若者が様々な人々と対話を通して課題や不満を解消していく日常があたりまえになることが必要であると著者は語っています。 日本の学校では、子どもの権利をきちんと理解せず尊重していないために、子どもの発達に大きな弊害が出ており、社会参加や政治参加への意欲が失われているそうです。日本若者協議会のアンケート調査や先進国の様々なデータを基に日本の若者が人権教育と民主主義教育を幼少期から十分に受けていない実態を浮き彫りにしています。 ジェンダーや多様性、テクノロジーなど、変化の激しい時代になっているからこそ、新しい価値観や経験を持った若い世代の人たちが、意思決定に関わるような日本を創っていくことが未来を良くしていく鍵であることがよくわかります。抑圧的な社会から、人生の選択の自由度が広がり自己決定を尊重する社会へ、日本を変化させる声を届けたくなる一冊です。
	マイクロアグレッションを吹っ飛ばせ-やさしく学ぶ人権の話	渡辺雅之	マイクロアグレッションとは、マイクロ＝微細(目に見えないくらい小さな)、アグレッション＝ 攻撃性。 `誰かを差別したり、傷つけたりする意図があるなしとは関係なく、対象になった人やグループを軽視したり侮辱するような敵対・中傷・否定のメッセージを含んでおり、それゆえに受け手の心にダメージを与える言動です。マイクロアグレッションは私たちの日々の生活や会話の中で「ふつう」に語られることが多く、発した本人もその問題性(加害)に気づかないという特徴があります。 人権とはそもそも何、差別ってどういうこと、とくにマイクロアグレッションはなぜ生まれ、どうすればなくなるのか？ 初心者にとっても分かりやすい本です。本書の中には、より詳しい内容を知りたい、理解を深めたい読者に対して、関連する記事を紹介するサイトURLとQRコードが随所に盛り込まれています。

推薦学科	タイトル	著者・編者	紹介文
医療福祉学科 視能訓練専攻 のおすすめ作品	NICU命の授業～小さな命を見守る最前線の現場から～	豊島 勝明	ドラマ「コウノドリ」の医療監修の医師の著書です。NICU(新生児集中治療室)は小さく生まれた赤ちゃんやどこか具合の悪い赤ちゃんが入院する病棟です。赤ちゃんの成長を支える場所ですが、とても短い命の最後を見守るという役目もあります。本書では、いろいろな新しい命に向き合ったときに「あなたならどうする」と問いかけます。命がどれだけ慈しまれ、大切なものであるかが感じられると思います。学校で実践される命の授業で、子どもの感想に「いじめはいけないことだと思った」というものがあるそうです。いじめについて全く触れる部分がないのにこう考えるのは、大切なことが伝わっている証なのでしょう。
	マイノリティデザイン―弱さを生かせる社会をつくろう	澤田智洋	自分の子が生まれつきの全盲とわかり、それまで視覚障害とかかわりのない生活をしてきていたら、その事実をどのように捉えてその子の将来を考えるのか・・・という重い状況から始まりつつ、著者は「弱さは伸びしろ」と、「弱さ」と言われるものの扱いを変えてしまいます。紹介されている「ゆるスポーツ」には自分も参加してみたいくなります！対人援助の中で使える楽しいヒントや、これまで自分で持っているとはちょっと違う形の価値観を見出せるかもしれません。
社会創造学科のおすすめ作品	「カランコエの花」:映像	監督:中川駿 出演:今田美桜	最近様々な作品にでている今田美桜さんの初期作品で、若手の中川駿監督がつくった30分程度の短編映画です。高校生活で悪意なく傷つけられるジェンダー・マイノリティについて丁寧に綴られています。
	Vai:映像		離島や人口の少ない地域に住む人々と大陸に住むこととの行き来や葛藤について記されていて、全員女性脚本家のオムニバス映画です。
図書館からのおすすめ作品	ソーシャルワーカーのための反『優生学講座』―「役立たず」の歴史に抗う福祉実践	藤井 渉	この本では相模原障害者殺傷事件をはじめとしたいいくつかの例から、優生学の歴史と問題を考える本です。歴史をさかのぼっていく構成であるため、現代の問題との関わりがわかりやすくなっているほか、ケアワーカー向けとして実務的な視点からも書かれており、福祉系の職業を志している方には特に役立つのではないのでしょうか。参考文献も豊富で、福祉について勉強したい方にもおすすめです。ぜひ読んでみてください。
	差別用語の基礎知識: 何が差別語・差別表現か	高木正幸	日本語の中には「差別語」や「差別表現」と呼ばれる、誰かを差別したり侮蔑したりする際に使われてきた言葉があり、本書ではそれらを使用例と併せて解説しています。古い本のため例として挙げられているのは新聞やテレビが中心ですが、差別用語とされた歴史的背景も解説されており、わかりやすい一冊だと思います。本書の冒頭にもありますが、「差別語」や「差別表現」を無くすだけで差別や偏見が無くなるわけではありません。その言葉の背景にあるものを考えるきっかけになる本として読んでみてください。
	収容所（ラゲリ）から来た遺書	辺見じゅん	第二次世界大戦敗戦後のロシアにある収容所での12年間を語るノンフィクション作品です。明晰な頭脳を持ち、収容所の捕虜たちに慕われた山本幡男氏を中心に語られています。自然環境にも生活環境にも過酷な中で、日本に帰還できる望みを捨てず、自身の持つ教養を活用して人々の心救う姿に胸を打たれます。山本幡男氏は、病を患い、日本への帰還を待たずにこの世を去ってしまいます。収容所の仲間が彼の書いた遺書を驚くべき方法で、ソ連の監視網をかいぐり遺族へ届けます。戦争や人権について考えるのに最適な本だと感じましたので、この機会にぜひ読んでほしいと思います。また、この本は、二宮和也主演の映画「ラゲリより愛を込めての」原作本となっています。映画DVDも図書館に所蔵しているので、視聴してください。
	自閉症の僕が跳びはねる理由 会話のできない中学生がつづる内なる心	東田直樹	跳びはねるのはなぜですか、どうして目を見て話さないのですか、みんなというよりひとりが好きなのですか。自閉症のいろいろな疑問について、自閉症である著者が自閉症の人の心の中を説明しています。疑問は50個以上ありますが分かりやすく説明してくれているので読みやすかったです。著者が中学生の時に書いた本だということにもとても驚きました。また、この本は、30カ国以上で翻訳され世界的ベストセラーにもなっていて、この本を原作としてドキュメンタリー映画化されています。映画化されたDVDも図書館に所蔵しているので、視聴してください。
	トランスジェンダーと性別変更 これまでとこれから 岩波ブックレットNo.1090	高井ゆと里	この本は、性同一障害者の性別の取扱いの特例に関する法律(「特例法」)について、当事者運動を続けてきた活動家、弁護士、研究者、医師の各分野の専門家が四つの章に分けて論を寄せています。法律という難しいイメージもありますが、トランスジェンダーに人たちにかかわる法・制度・医療・歴史について分かりやすく書かれているので、レポートや卒論を作成時に役立つ本だと思います。
	リアル	井上雄彦	車椅子バスケットを題材としたマンガです。同じ「車椅子利用者」のなかでもそれぞれ出来ること・出来ないことがあるということが分かります。また、車椅子を利用するようになった理由や葛藤、人間関係も丁寧に描かれています。『スラムダンク』の井上雄彦先生が描かれた作品なのでもちろんバスケットのシーンも迫力満点です。現在15巻まで所蔵しています。
	生まれたのは自閉症くん。	moro	自閉症の子が生まれてから卒園するまでの笑いあり涙ありのコミックエッセイです。4コママンガなのでとても読みやすく、例えばその場でパラパラと眺めてみたりするのもいいかもしれません。ブログでも日々の出来事を絵日記のように書かれているので、気になった方はそちらも読んでみてください。